

共同討議 戦争と記憶をめぐる

大阪大学教授 川村 邦光
静岡大学助教授 矢野 敬一

福島県南高等学校地理歴史・公民科（社会科）研究会と県北における同研究会との合同研究会も、今年で3回目を迎えた。第1回目は、「ナショナリズムの生成と現在」というテーマで、東京大学の高橋哲哉先生と筑波大学の中野目徹先生から、それぞれ現今の日本に取り巻くナショナリズムの問題に関し、それぞれの講演と二人による討議が行われた。第2回目は、千葉大学の佐藤和夫先生から、「現代世界の暴力と哲学がつなぐもの」というテーマで講演していただくとともに、福島大学の小野原雅夫先生との討議が行われた。

このようにして開催されてきた合同研究会であるが、テーマを設定するにあたっては、私たちが同時代人として体験しつつある現代社会の出来事に対し、アクチュアルな問題意識をもって取り組むようにしてきたつもりである。それは、現在進行中である教育基本法の「改正」にみられる新たなナショナリズムの動きや、イラクにおいて進行している「暴力」の表出も、私たちが看過することが出来ない同時代の出来事と考えるからである。そして、この研究会は、このような現実に対し、一教員、または一市民の立場から、批判的に検討を加える場であることを目的としている。

第3回目の今回は、「戦争と記憶をめぐる ―戦死者の祀り方を考える―」というテーマを設定した。その理由は、小泉首相の靖国参拝を契機に再噴した戦死者の祀り方にかかわる問題を、早急に考えてみる必要があると感じたからに他ならない。そこで、『戦死者のゆくえ』（青弓社、2003年）を編纂し、戦死者の祀り方や靖国神社といった問題に関して深い造詣を持つ、大阪大学の川村邦光先生に講演していただくことを考えた。そして、戦争と記憶の問題を研究テーマとしているとともに、同書の執筆者でもある静岡大学の矢野敬一先生と共同討議していただくことで、当該テーマに関する問題意識を深めることを企画した。

幸いにも、川村先生は会津高校のOBで、福島県に縁があるということもあり、遠路かつ多忙な中にもかかわらず、快く講演を引き受けて下さった。矢野先生も、川村先生が主宰する研究会の一員であったということもあってか、今回の企画に御快諾をいただいた。以下は、この合同研究会のうち、両先生の討議の部分を探録したものである。

（安積高校 小田賢二）

1. 戦死者を語ることの困難さ

矢野 われわれに与えられたテーマは、「戦争と記憶をめぐる」ということですが、特に戦争という問題は、その本質がきわめて見えにくい問題といえます。というのも、戦争は政治の領野に限られるものではなく、銃後の暮らしといったことも戦争の側面に他ならないからです。このように戦争は多様な

性質をもつため、われわれは、何らかの視点を通してしてか、戦争を対象化することしかできないからです。

この対象化の一つの方法として、戦死者をどのように祀ってきたかということがあげられると思います。そしてこのことは、われわれが戦争をどのように表象してきたかという問題に関わってくると思われれます。

川村 そうですね。この戦死者とはきわめて自明の

ようなことですが、それを語るとなるときわめて難しい問題ですね。確かに、戦死者とは、生者が戦争による死者に対して名付けたものに他なりません。しかし、このように、誰かが誰かに対して戦死者と名付けることによってしか、戦死者を表象できないともいえます。そして、誰がどのような死者を戦死者と名づけるのかといったことに、文化的、政治的、そして宗教的なテーマが現れるのです。

例えば、靖国神社と千鳥ヶ淵戦没者墓苑では、どちらを参拝するかによって政治的立場が表明されます。また、戦死者を、戦争犯罪者・犠牲者・英霊などといったように、どのように表現するかによって、その立場も表明されます。

しかし、この戦死者の表象に関しては、そもそも、戦死者というごく一般的な言葉で表すことのできる戦死者はいるのか、という問題もあります。確かに、われわれは、戦争記録や戦記物・小説などから、おおよそ一般に通用する戦死者というイメージを形成しているといえますが、これはおもに戦闘員の戦死に限定していることが多いのではないのでしょうか。こうすると、現地にいた非戦闘員であるさまざまな日本人や、戦場となった現地の人の死者が抜け落ちてしまいます。

このように、戦争には多様な戦死の様相があり、一般化することはきわめて難しいのです。つまり、一般的な戦死者像を構成したと思っていても、それは特定の位置・立場からのものでしかないのです。ですから、戦死者を考える場合、特定の個別的な戦死者という点から考えることが重要となります。そして、そのような個別的な戦死者と出会い、戦死者の現われに立ち会う場が、生者が戦死者を亡霊として表象するということにあるのではないのでしょうか。

2. 戦死者の亡霊

矢野 戦争に関する亡霊の話は、玉砕した部隊が関係者のもとに亡霊となって現れるといったようにいくつかの共通したパターンをもつものがありますね。例えば、黒澤明の『夢』というオムニバス作品の一話でも、玉砕した部隊が、一列になって現れるといった場面が描かれています。

今回、川村先生が紹介された、戦死者の亡霊をめぐるお話のなかで、一番印象に残ったのは「大挙し



川村邦光氏

川村邦光氏のプロフィール

1950年福島県生まれ、1969年会津高校卒業、東北大学大学院文学研究科実践哲学専攻博士課程を修了。現在、大阪大学大学院文学研究科教授。専門分野は、民俗学および宗教学。

著書に『幻視する近代空間』（青弓社、1990年）、『オトメの祈り』（紀伊国屋書店、1993年）、『オトメの身体』（紀伊国屋書店、1994年）、『セクシュアリティの近代』（講談社、1996年）、『幻視する近代空間』（青弓社、1997年）、『〈民俗の知〉の系譜』（昭和堂、2000年）、『オトメの行方』（紀伊国屋書店、2003年）、『性家族の誕生』（筑摩書房、2004年）、『ヒミコの系譜と祭祀』（学生社、2005年）などがある。

て訪れる白骨の幽霊部隊」というもので、インパール作戦で従事した部隊で生き残った兵士に、かつての戦友たちが亡霊となって現れるというものです。

そこで、亡霊は、「魂は祖国にはかえっておらん。だいいち、骨はこの地の大地に残されておろう。飢えた遺念はここに残ってましよう」と語っています。このことから分かるように、亡霊とは、遺族やかつての戦友などといった、戦争に残された者の想像力の結晶であるとともに、戦争の記憶にあり方に大きくかかわってくるということです。

川村 そのとおりですね。このように戦死者の亡霊といったものは、それが現れる遺族や戦友にとって、リアリティをもって生きるものでしょう。そして、そのことが戦死者への弔いを促す動因ともなるものでしょう。

確かに、兵士としての戦死者は、靖国神社に英霊という名の神として祀られますが、多くの残された遺族にとっては、神としてよりも、菩提を弔うといったようにホトケとして処遇されていることが一般的だと思います。つまり、遺族にとって戦死者は、

公の面においては、名誉の死として祀られるものの、私的な面においては、この世に無念を残して死んだ者として捉えられるのです。このような意味で、戦死者を亡霊と表象することは、敵対 (hostile) と款待 (hospitality) とが会う場面でもあるのです。

そして、このようにして戦死者の供養が続けてきたとしても、供養が足りない、霊が鎮まってない、浮かばれていないとする思いが、遺族のなかにはあり続けていたのではないのでしょうか。例えば、東北地方では、未婚の戦死者の供養のために、ムカサリ絵馬や花嫁人形の奉納といったことが行われています。これは未婚の死者の霊は祟りをなすために、成仏のために手厚い供養をおこなうという習俗に基づいています。また、今回、紹介した戦死者をめぐる亡霊譚が各地にあることからわかるように、戦死者の霊を怨霊とする感覚が少なくともあったと思われます。

このような遺族の戦死者の霊に対する供養熱を助長したのが、昭和28年(1953)から始まった厚生省の遺骨収拾ではなかったでしょうか。敗戦直後は、ほとんどの遺族は戦死の確認がされていない場合を除けば、一度葬式をおこなって、弔いは一応済んだと考えていたと思われます。しかし、この遺骨収拾が、多くの人に、慰霊・弔いが未完のままだったことを気づかせ、あらためて戦死者の供養不足を思い



矢野敬一氏

矢野敬一氏のプロフィール

1963年北海道生まれ、1981年札幌市立旭丘高等学校卒業、筑波大学大学院歴史人類学研究科博士課程を修了。現在、静岡大学助教授。専門分野は日本民俗学。

著書に『写真家・熊谷元一とメディアの時代 昭和の記録／記憶』(青弓社、2005年)、『慰霊・追悼・顕彰の近代』(吉川弘文館、2006年)

知らせたといえましょう。

3. モノによる戦争の記憶

矢野 遺骨の収拾により戦死者を供養するということは、われわれがどのように戦死者と向き合うのか、つまり、どのように戦争を記憶するかということに繋がる問題とも思われます。これに関して、最近非常に興味深いテレビ番組を見ました。これは『日本再発見』というNHKの番組で、「南の島の鎮魂歌」と題された回のものでした。内容の概略は、パラオ諸島で空襲を受けて沈没した海軍の輸送艦「石廊」の唯一の生き残り兵である石川さんが、国に陳情を重ねるとともに、自らも海に潜り戦友の遺骨を収拾しようとする様子を描いていました。

この番組のなかで興味深かったのは、海に潜ろうとする老齢の石川さんに、スキューバを教えたパラオに在住する20代の日本人女性が、戦争への関心を深めていくという点です。彼女は、石川さんから戦争の話聞くばかりでなく、石川さんと共に海にもぐって、撃墜された旧日本軍の飛行機や沈没した船の残骸などを見つけるにつけ、戦争の記録を付け始めたということです。このように具体的なモノを通して、戦争へのリアリティを持つことができたのです。

このことは、その後、日本に戻った石川さんの活動と比較してみると、より鮮明になると思われます。というのも、石川さんは、戦争体験を伝えるべく、地元の小学校で、自分の体験を話しますが、その話をきく子ども達の反応が、あまり芳しくないのです。これは、戦争体験者の話が、リアリティを失っているということの意味するのではないのでしょうか。つまり、言葉により戦争の記憶を喚起するということが、きわめてできにくい状況にあるということではないのでしょうか。

川村 それは、戦争の記憶を伝達する言葉の有効性が薄れているということでしょう。確かに、私が幼い時には、自分の周りに傷痍軍人の姿もあり、戦争というものリアリティをもっている状況でもありました。

しかし、戦後も60年以上過ぎた現在では、戦争の記憶の形骸化が進行しています。確かに、毎年8月15日に政府主催の「全国戦没者追悼式」が開催されますが、これは、かつて天皇のために殉じた戦

死者が「戦没者之霊」としてひとまとめにされて、いわば匿名化された無名戦士の霊として、追悼されているにすぎません。

そして、このことこそが戦争のリアリティを欠如させるものでしょう。というのも、ここでの「戦没者」は、天皇や首相から「追悼の意」を捧げられる犠牲者として召喚されているにすぎません。そして、「戦没者」という、個別の身体のない、ひとまとめにされた抽象的な集合体の死とされ、それが現在の繁栄の礎となったとして顕彰されます。しかし、ここでは、戦死者の「死」の様相が隠蔽され、殺しかつ殺された戦死者の身体は、隠されて見えてこないのです。

広島や長崎における原爆の問題についても同様のことがいえるでしょう。毎年、8月6日と9日に開催される式典は、パターン化されたものになっていることは否めません。また、被爆体験の語りに対しても、リアリティが失われつつあるといえましょう。

4. 戦争の記憶をどのように継承するか

矢野 言葉による戦争に記憶という問題に関しては、昨年（2005年）の6月に、興味深い報道がありました。それは、青山学院高等部の英語の入学試験問題で、元ひめゆり学徒の語り部の話が「退屈」（boring）だったとする表現の表現があり、学校側が謝罪したというものです。

確かに、この英文の元ひめゆり学徒の語り部に関する表現は、誤解を招きやすいものでしたが、全体の趣旨としては、戦争体験を次の世代に継承するために、言葉だけでなく体験によって伝えることも大切ではないかというものでした。実際、この英文には、大体次のようなことが書かれていました。

沖縄に修学旅行に行った高校生が、戦争当時のまま残る防空壕の洞穴を訪れる機会があり、戦争を体験した老ガイドの後について、各自が自分の明かりをもって洞穴のなかに入って行った。そこで誰かが、冗談半分に明かりを消そうと提案して、みんながそれに同意し、明かりを消すと、完全な暗闇が現われ、

その暗闇に高校生は、戦争の恐怖を追体験するとともに、老ガイドが、なぜ多くを語ろうとしなかったのかを理解したというものです。

そして、この後に問題となる、語り部の話が「退屈」だったとする話が続くことになります。語り部の話は何度となく繰り返されたために定型化してしまっていると感じられた、というのです。新聞は英文での洞穴での件には全く言及せず、「退屈」という部分だけを恣意的に取り上げ、断罪したのです。しかし、この英文は、戦争の記憶といった問題に関しては、示唆的なものを含んでいます。つまり、戦争を言葉で記憶することと、言葉でないもので記憶するといったことの問題に繋がるからです。こうした問題に真正面から向き合わなければ、空虚なスローガンだけが空回りし、戦争の記憶の継承という問題は形骸化しかねません。

先の石川さんの例からも明らかのように、戦後60年を経た現在において、言葉という手段のみでは、戦争の記憶を次の世代に伝えていくのは、困難な状況となっています。そのためにも、言葉によらずして、戦争を記憶する作業が必要となってくるでしょうし、それが、戦争へのリアリティを回復するものとなるとも思われます。

川村 小池光という歌人の歌に、「戦没者といひかへしとき戦死者のするどき眸はみえなくなりぬ」というものがあります。先ほど「全国戦没者追悼式」に言及しましたが、そこでは、国家によって戦死者が「戦没者」に置き換えられ、匿名化された集合的な「戦没者之霊」として表象されています。その結果、戦死者の個別性が消され、そこでは特定の戦死者に関する追憶や記憶は無用とされています。

それだからこそ、このような戦死者を、リアリティをもった存在として想像することが不可欠であると思われます。しかし、われわれ戦後生まれの者は、この想像を記録された文字やフィルムといった情報でしか行いできません。そのためにも、「戦死者のするどき眸」を見据え続けることが必要なのではないのでしょうか。